

今月2年3月1日発行 春燈/第75巻第3号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

3月号

2020 March



安住敦の句郎の句

いつも来て凭る一樹あり芽吹きけり

『柿の木坂雑唱以後』平成二年

昭和六十二年の句で、前後には〈癒えざれば梅日和と言ひ難し〉〈憂ひなきがごとくありけり春の昼〉といった句が並ぶ。体調の不具合から前年には朝日俳壇選者同年には俳人協会の会長を辞されており、当時のご心労がしのばれる。それを癒し、支えてくれたであろう一樹の芽吹き。逡巡の果ての決断を語いつつ、新たな時代の到来に期待を寄せる先生の最晩年のお姿が浮かぶ。

浅木ノエ

安住敦の句郎の句

夕蛙いもうと兄を門に呼ぶ

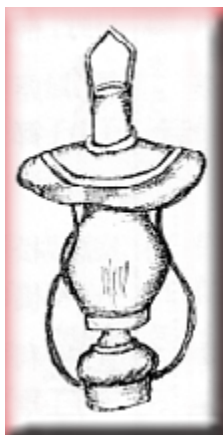
『古曆』昭和二十九年

復員直後に師は兄と妹の句をいくつも詠んでいる。自註には「兵舎での、夜毎の夢に見た子供たちを現実眼の前にしての喜びからであろう」とある。

特有の騒々しさの中に、心地好い郷愁をもつ夕蛙の鳴き声はこのとき、戦地にて向き合った死の時間を押し遣る力であったようにも思える。根底に厳肅さあつての何気無い日常句を感じるのである。

平沢恵子

安立公彦



身を正し令和の初日拝むや

明け方の月ほのとある初景色

吐く息の白きを愛づる初御空

夕さると一声過ぐる初鴉

初筑波双峰凜と雲寄せず

燈下集



○ 太田慶子

微光ひく弥陀三尊や寒牡丹

煤払ふ木彫の仏膝の上に

うんともなくすんともなくて懷手

主治医の呼ぶファースト・ネーム冬ぬくし

落葉降る境内よぎる郵便車

○ 青柳雅子

鯛焼の天地を返す鉄の音

ウインドーに映る我が影帰り花

「第三の男」に出会ふ冬の駅（恵比寿駅）

わが町のハザード・マップ見る寒さ

良きことを記すつもりの日記買ふ

○ 木多芙美子

この辺りいつも日当り冬の草

あと退ることも歩みや冬の蠅

年の夜の寝ねがてに聴く鐘の音

母の齡越えて紅差す初鏡

ほどほどのつき合ひ長しとろろ汁

○ 小張志げ

嘘つける相手の欲しいホットワイン

白鳥を見る女の首のしなやかに

着ぶくれて人の情けの重さかな

それとなく帰宅うながす年の暮

日の恩やひとかたまりの寒雀

○ 江 草 礼

年用意畳障子のなき暮し
ポインセチア異国めく街迷ひゆく
眠る山倒木にきく息づかひ
なまはげの恐怖半減標準語
新柄のスカート巻きて初句会

○ 岩 永 は る み

水仙のひかり零して切られけり
今朝の無口少し気がかり蒲団干す
笹子鳴く夕日集まるひとところ
われよりは先に死ぬ犬枯木道
落しものの釦がひとつ初氷

○ 林 紀 夫

咳ひとつ青信号を急ぎけり
暦果つ壁に残れる画鋏跡
櫟や三十四花の「花ごよみ」
初明り田中の小径の嘉祥なる
初空や医・俳の道啓かれよ

〔祝・まをさん春星膏〕

〔祝・嘉信さん春星膏〕

〔祝・真啓さん春燈膏〕

○ 中 野 さ き 江

寄する波より引く波の寒さかな
枯木立風の奔放はしまりぬ
反故を焚く煙ひと筋年惜しむ
忙しさのしばし納まる柚子湯かな
厨の灯消してわが意やこつごもり

○ 栗 原 完 爾

水音に急かされてゐる冬紅葉
初しぐれ聞き耳たつる双耳壺
正坐して天井あふぐ寒さかな〔耳庵句〕
掲額に仁の太文字冬座敷
日も風もたつぷり浴ぶる冬木かな

○ 小 菅 礼 子

柚子採るや葉付きの枝を喜ばる
年用意手抜き許さるる齡
健康優良児九十二歳の春迎ふ
新玉の年や想ひ出の神楽坂
一步一步庭石を踏む霜の朝

○ 本 多 遊 方

除夜の鐘煩悩増やす世となれり
除夜の鐘ボディーブローの効きにけり
お焚上げの焰に映る去年今年
初日影初代プリウス未だ乗る
泣初や寺にハーフの孫ふたり

○ 武 田 巨 子

大釜の甘き湯気受く大根焚
遠目なる賢者のさまに冬の鹿
底冷の石庭の黙石の黙
天井画の竜を震はす雪起し
室の花ひとつひとつの花言葉

○ 諸 岡 孝 子

とこしへに昭和の空も餅搗も
舞ひ降りていつものつがひ初雀
籟初や鼓こたふる能舞台
爺と孫初会の碁筭ひきよせて
ともかくも継ぎきし血筋女正月

○ 小 泉 三 枝

煮凝や箸をするりと父の酔
時雨るるやきつねうどんの大き揚げ
炬明りに魚拓の泳ぐ釣談議
万策の尽くる枯蓮なほ思案
柊の咲くやシャンパン泡立ちぬ

○ 平 野 加 代 子

悪女にもなれず海鼠腸すすりけり
天界の父の小言か冬の雷
この命何処へ行かむ初明り
うそのやうにまことのやうに風花す
冬花火明日の朝の空の蒼

○ 田 嶋 洋 子

マフラーや程良き歩行医師に説かる
白足袋や外出少なく生きし母
蒼天を鳴き交はす鳶開戦日
隣家より洩れ来る詩吟枇杷の花
好日や餅つき大会案内の来

余言

安立公彦

声かけ合ふも同じ血筋や薬喰 片桐てい女

「薬喰」は、寒中の滋養のために、獣肉を食べること。特に鹿の肉は、寒中の邪気を払い健康に善いということ、広く好まれたと言う。時代を感じる季語である。

この句、「血筋」が善く効いている。「薬喰」という言葉を善く生かしている。「声かけ合ふも」の字余りの上五も、「同じ血筋や」の中七に、すんなりと解け合っている。「季語の効用」は善く言われている言葉だが、この一句にその優れた一例を見る思いだった。

みづうみの沖さんざめく神迎 西川 保子

「神迎」は、旧暦十月晦日に、出雲大社に集まった神々が帰るのを迎える神事」と辞書は記す。神事は神を祭る行事である。神事の中には、神社の神事として演じられる神事能もあるなど、地域によりその行事は多種に渉る。

この「みづうみ」は琵琶湖。その広大な琵琶湖の、「沖さんざめく」が、善く「神迎」を呼び込んでいる。神事は、

述べる作者の胸中に打たれる。結句を「妻逝けり」と結ぶ甲武信さん。夫婦俳人の典型とも言えるお二人だった。

水仙や若き富子の一途の目 三宅 文子
揺るぎなき絆の一書春灯下 佐渡谷秀一

両句とも、「祝『白地』」の前書がある。恐らく富子さんの訃報を聞く前の作と思われる。

前句の、「若き富子の一途の目」は、『白地』の口絵の富子さんを描いた中澤弘光氏の絵。「静聴」の題が付いている。宮崎県都城市立美術館蔵の添書がある。この絵の逸話は、甲武信さんが『白地』の「あとがき」に書いている。モデルは二十歳前後の富子さん。三宅さんの句の通り、清純さに打たれる一途な視線である。

佐渡谷さんの句は、『白地』の読後感。「揺るぎなき絆」はこの一書の本意である。『白地』を読んだ人は、「揺るぎなき絆」を確と再認識されたことであろう。へ夕焼や無意識にとる夫の腕へ、へ看取り呉るる夫を待ちある日永かな。病床にあつても、富子さんの表現は揺るぎ無い。

ポインセチア和の無き戸を恐れけり 卯木 堯子
「ポインセチア」は、メキシコ原産のトウダイグサ科の

豊作、豊漁を呼ぶ行事の一つ。数多ある神事の中でも「神迎」はその中心にあると言う。崇高な一句である。

白毫のきらりと寒に入りにつけり 佐藤 信子

「白毫」は、仏の眉間にある白い毛を指す。光を放つとされ、水晶などを嵌めている。仏の三十二相の一つに、「眉間白毫相」があると言う。仏像の故事来歴は深い。

この句、そういう仏像を祀る御寺での作品。作者は足繁く寺に通い写経二万巻を納めているという。この白毫の御仏も、かねて詣でている仏ではなからうか。「きらりと寒に入りにつけり」の具象表現の奥には、御仏への信心の深さが感じられる。古寺、名利を訪れたい思いの深まる作品である。

冬麗の空ひろびろと妻逝けり 柴崎甲武信

「十二月十五日富子昇天」の前書がある。柴崎富子さんの第三句集『白地』の発行は、令和元年七月だった。「あとがき」に甲武信さんは、「この『白地』が妻の最後の句集となる」と記す。長い寝たきりの病床だった。

『白地』の最終章には、へ白地着し青年の日の夫恋し」という甲武信さんとの出合いの句がある。今、去りゆく富子さんへ、「冬麗の空ひろびろ」と、清浄な永久の途上を

常緑低木。初冬の頃、茎の先端の苞葉が鮮紅色に変わり、クリスマス装飾用の切り花として、クリスマスフラワーの名もあると言う。猩猩木の別称もある。因みに「猩猩」を辞書に当たると、中国で想像上の怪物とのこと。

この句、「和の無き令」が言い得ている。「令」は^{おきて}捷法^ゑ、律令。「和」は文字通り仲よくすることだが、「大和国」の意もある。「令和」の代も平和であつてほしいと言う思いは、この国の全ての人の思いである。

年取らぬつもり同士冬日和 篠原 幸子

高齢化率と言う言葉がある。六十五歳以上の高齢者人口が、総人口に占める割合を指す。この六十五歳と言う規準は、世界保健機関の定義。尚、六十五歳から七十四歳までを前期高齢者、七十五歳以上を後期高齢者と呼ぶ。しかし令和の時代、現行の後期高齢者の呼び名は相応しくない。

この句を見ていると同感の思いが湧く。「年とらぬつもり」は全くその通り。「つもり」が善い。生ある者は全て年を取る。しかし、「年取らぬつもり」の生き方は、当人の思いであり心情である。更に中七の「つもり同志」が作者の心情をしっかりと具象化している。「同士」、善い言葉だ。これを「春燈」下に集う全ての人を指す言葉とした。「冬日和」はやがて春を呼ぶ。

当月集

安立 公彦選



○ 中澤 弘

白菜を干すぬれ縁の光かな
隣家よりふはり訪れ柿落葉
ちんどん屋聞けばわびしや柿落葉
初筑波ながむる笠間の陶器宿
深井戸のつるべくみ上げ寒の水

○ 田中 嘉信

映りぬる池の明るさ石路の花
雪吊の筋目まつすぐ通しけり
屹立の濠の石垣枯葎
夕日影落葉の描く波紋かな
時雨るるや巡礼いまだ終はらざる (悼・秀次さん)

○ 山浦 紀子

三分のカップラーメン風邪ごち
極月や顔認証の自動ドア
サイフォンの著き蒸気や街師走
交差点に雲の影ゆく師走かな
番傘の新雪はらひ裾はらふ

○ 佐俣 まさを

泥の渦宥めぬるかに蓮掘女
園丁の覗きて行きぬ寒牡丹
逝く年や床屋の椅子に第九聴く
相輪を過ぎゆく雲や去年今年
初鶏の一声時をあやまたず

○ 佐藤 まさ子

ふはふはと飛ぶ綿虫や野良仕事
大樗囲む畑や大根引く
枯蓮の鉢たつぷりと注ぐ水
展望台に富士見ゆる日や寒茜
子供等と遊ぶ障子の影絵かな

春燈の句

安立 公彦選



神奈川 辻 泰子
駅西口鮎屋の前の聖樹かな

(近代美術館鎌倉別館 句)

骨太の裸婦像の胸山眠る

江の島の波の語らふ冬景色

忘却の降り積むやうに雪だるま

女子ゴルフ活躍目立つ冬日和 賛・涉野日向子

奥山の定席守り冬ひばり (悼・木馬女座亭)

ゆれ動くオリンピックや去年今年

小雨降る清瀬の里や波郷の忌

立冬や目覚めは高階病棟で

病む部屋のカーテンのぼる冬の虫

しぐれくる眼下ひしめく千の屋根

庭師来て明るくなるや石路の花

肩もみを夫に願ふや冬日向

またひとつ自問自答の懐手

神奈川 辻 泰子

東京 鈴木としお

千葉 東木 洋子

群馬 小菅 澄重

空澄みてからつ風とや上州路

にこやかに茶会で閉づる聖夜かな

ねだるとき猫なで声や漱石忌

敵落とす城にからくりそぞろ寒 (彦根城)

大根の葉付きが欲しや切り売られ

小さき夢あへなく捨つる年の暮

雲流るる山の稜線野分晴

吊橋に足のすくめる紅葉かな

綿虫や御屋敷囲ふ海鼠壁

散紅葉漆喰塗の蔵座敷

冬至湯や侘び寂び浮かべ喜寿なりき

懐手の似合ふ君なり漱石忌

曾孫生るまるとして餅に似る

餅花の色やはらかに幸揺るる

滋賀 馬場 節子

栃木 森 ふく

神奈川 高橋 寛子